

□ 器楽（室内楽を含む）

渡 辺 和

2018年9月、ミュンヘンARD国際音楽コンクールで5年ぶりに行われたピアノ三重奏部門で、東京藝大出身のヴァイオリン小川響子、チェロ伊東裕、ピアノ秋元孝介から成る葵トリオが優勝した。堤剛、内田光子、澤和樹らも最高位2位に留まった「優勝を出さない大会」、ましてや日本人アンサンブル優勝は東京Q以来48年ぶりである。年次展望として些かバランスを欠くと承知の上で、この団体について詳記することをお許し願いたい。

前桐朋学園学長で霧島国際音楽祭監督も務める館長堤剛の強い意向で、2010年にサントリーホールは若いプロ奏者の常設セミナーとしてチェンバーミュージック・アカデミーを設立する。藝大出身の小川、伊東、秋元は、第3期生として2014年から2年間、この常設セミナーで研修を積んだ。アカデミーを終えた2016年秋、更に室内楽を追求すべく葵トリオを結成。半年後の藝大室内楽定期で公式にデビュー。ミュンヘンに向け練習を重ね、参加17団体に選ばれる。9月初旬の1週間で4ラウンド総計9曲を演奏、6月に離隔メルボルン大会グランプリを獲得し本命視されたマーヴィン・トリオを下し、過去11回のこの部門で6度目の優勝団体となる。2位なし1位の圧勝だった。

翌10月、卒業生の快挙を見とどけるかのように、平成初期からの藝大室内楽を牽引した岡山潔が世を去る。12月14日、サントリーホール・ブルーローズで、ホール主催「葵トリオ凱旋コンサート」が開催された。3人が通った懐かしい学び舎の客席には、堤剛館長、岡山と共に藝大室内楽を支えた山崎伸子、アカデミー講師を務める元東京Q磯村和英の顔もあった。コンクール本選で弾いたシューベルトのピアノ三重奏第2番を再演、長大さを感じさせぬ若さ溢れる楽興の時を繰り広げ、熱い拍手を浴びた。

興味深いことに、藝大でもサントリー・アカデミーでも、葵トリオはピアノ三重奏団として特定の名奏者に師事した経験はない。個々で室内楽を学び、自分らで楽譜を読み、自ら磨いたアンサンブルである。現時点で、小川は澤学長の尽力で成った藝大からベルリンフィル・オーケストラ・アカデミーへの初の派遣として独都滞在中。伊東はザルツブルク・モーツァルテウムで学んでいる。葵トリオが次の時代の室内楽を牽引するスターとして活動出来るか未だ未知数だ。が、平成という時代に展開した日本の室内楽教育のひとつの総決算であることは、紛れもない事実である。

※

ヨーロッパでは時代遅れの才能発掘システムとして若い才能や音楽マネージメントに敬遠される傾向にあるコンクールだが、葵トリオのミュンヘンARD優勝ばかりか、ピアノ・コンクールを素材とした恩田陸の小説『蜜蜂と遠雷』が2017年直木賞を獲得したこともあり、日本ではあらためて関心が高まっている。2018年には同小説がモデルとした浜松国際ピアノ・コンクールが開催され、音楽ファンを越えた関心を集めた。

室内楽でも、ミュンヘン大会の吉報が伝わる中、2012年から2年毎に名古屋の宗次ホールが主催する「宗次ホール弦楽四重奏コンクール」が開催された。プロの指導を受ける機会が少ない中部以西の若い団体に原田禎夫らがレッスンを施し、その成

果発表として始まった大会だ。4回目となる今回、日本拠点の団体対象という規約はそのままに、4月のロンドン・ウィグモアホール国際弦楽四重奏コンクールを越える優勝賞金200万円が提供されると発表された。結果、前回ミュンヘンARD弦楽四重奏部門で第3位に入賞したQアマービレや6月のメルボルン大会にも参加したタレイアQなど、現時点での若手トップクラスがこぞって参加する最高峰の国内大会となり、この両団体が1位を分けた。今後も今回のやり方が維持されるか不明だが、コンクールが若い奏者の室内楽への関心を呼び起こす牽引力となることを期待したい。

コンクールが日本では未だに重要な評価の指針となっている状況は、主催側のアーティスト選択の場からも明らかである。2018年は、官民共にホールが主催公演の演奏家を中堅から若手に切り替える過渡期となった。2008年ミュンヘンARD弦楽四重奏部門3位のウェルズQや、同2016年同3位Qアマービレが、中央や地方での演奏機会を順調に増やしている。室内楽のマーケットが増えているわけではないので、中堅団体とすれば仕事の間が減る厳しい状況だ。そんな中、ドイツ拠点に中堅に成長したロータスQが日本での活動を活発にしているのは喜ばしい。

ホールに目をやると、2018年も近年の器楽室内楽の小規模会場シフト傾向は止まらない。クラリネットのヴァイマン、チェロのヴェスベルウェイやカブソン、ハーゲンQやフォーレQなど欧州で評価が高い著名アーティスト公演を主催するトッパンホールを筆頭に、ハクジュホール、ヤマハホール、王子ホール（年頭から10月まで休館）など、400席以下の会場が内外の著名室内楽奏者・団体の拠点たり続けている。関西圏でもフェニックスホールや青山バロックザールの活動が活発。宗次ホールに刺激されてか、とりわけ名古屋では小規模会場の動きが目覚ましい。活動を停止していた日本での小規模個人運営ホールの嚆矢たるルンデの会が、新組織で復活の動きも伝えられる。

会場の小規模化は公共セクターでも同様。大ホールでの著名団体の室内楽公演は所沢アークホールでのジュリアードQ公演など極めて例が限られ、かつては東京Qなどを大ホールで行った札幌や京都も、室内楽は音楽的に無理のない小ホールを会場とするようになった。東京文化会館も小ホールでの自主公演を充実させている。激安で関東広域の音楽ファンから堅い支持を得る武蔵野市民文化会館が器楽室内楽公演の勢いを落としているのが心配されるもの、千葉の浦安音楽ホールや、フィリアホール、かなつくホール、サルビアホールなど指定管理者が運営する横浜市各区の小規模音楽ホールは、積極的に器楽室内楽コンサートを主催している。

最後に、極めて重要かもしれないひとつの傾向に触れておこう。20世紀末からのピアノ・ブームに始まったシリアスなクラシック奏者によるジャズなど娯楽性の高い音楽は、エベースQを頂点にヨーロッパでは大きな潮流となりつつある。日本では、モルゴーアQの「プログレ」など限定された聴衆をターゲットに展開していたこのようなレパートリーは、主催側が敬遠する傾向にあった。だが、12月のフィルハーモニクス・ベルリン＝ウィーンの公演など、実力も娯楽性も兼ね備えた海外団体の地方を含めたツアーが始まっている。サントリーホールも、チェンバーミュージック・アカデミーと連動し6月開催が定着した「チェンバーミュージック・ガーデン」と別に、AVEXと共同で秋にバッシュメットや辻井伸行など広い集客力のあるスターを据えた室内楽音楽祭「サントリーホールARKクラシック」を10月に起ち上げた。葵トリオの快挙とは真逆にも見えるそんな動きは、新たな元号となった日本の室内楽に新たな聴衆や嗜好を開拓し得るだろうか。